

「海道」「東国下」「盛久」

外村 南都子

能「盛久」は「東国下」をもとにし、さら  
にさかのぼれば「海道」に至るのではないか。

「海道」は鎌倉後期に成立した早歌の曲名  
で、京から鎌倉に至る長篇の道行である。早  
歌は武士自身の歌う歌謡として鎌倉を中心と  
する関東文化圏に生れ、およそ二百年余りの  
間歌われた。この「海道」は、

行々たる露の駅に 思ひを千里の雲に馳せ  
渺々たる風の泊に 心を幾夜の波に砕か  
む 霞をへだて霧を凌ぎ 立ち別るれば旅  
の空 雲井の外にやなりぬらむ 馴れ来し  
都を顧みて 逢坂越えて打出の 浜より遠  
を見渡せば 塩ならぬ海にそぼだてる 石

山詣での昔まで その面影の心地して 山  
田にかかると湖の波 矢橋を急ぐ渡守……

というように始まる。以下、道中の地名を八  
十三もおりにみながら、東海道の旅を三曲連  
作で歌いあげ、鶴が岡神社に言及し「民の籠  
も開ひにければ 九年資へ豊かなり」と、祝  
言をもって結んでいる。早歌の第一撰集の宴

曲集巻四所収で、作詞作曲者は、大成者明空  
である。宴曲集五巻五十曲の成立は永仁四年  
(一二九六)の少し前であるが、「海道」が  
作られたのは建治(一二七五—七)あたりま  
でさかのぼる可能性がある。「海道」は本格  
的道行文のはしりともいうべき作品で、延慶  
本平家物語の重衡の東下りの条にほとんどま  
ごと引用されていることは、古くから指摘  
されていた。また、太平記の俊基の東下り、  
あの「落花の雪に踏み迷ふ」と始まる、戦前  
よく暗誦された有名な道行文などにも影響を  
与えたといわれている。

そういうことで、「海道」の道行が早歌の  
中でわずかに一般に知られているようだが、  
実は早歌百七十三曲の中には、他にも道行や  
それに類する曲が多く含まれている。宴曲集  
に奥州への旅を旅情豊かに歌う「羈旅」や海  
の旅の「海路」「海辺」、旅の別れを歌った  
「行余波」「留余波」などがある。次の宴曲  
抄になると、「熊野参詣」(五曲連作、京一

熊野那智山)「善光寺修行」(二曲連作、鎌  
倉—信濃善光寺)の長篇道行が作られた。い  
ずれも明空の作である。詳細な地名列挙をも  
って、当世人びとの尊崇を集めた寺社への参  
詣の旅を歌うこの二作品は、現世の浄土と考  
えられた寺社への道中が人生の旅と重ね合わ  
されて、現当二世の願望を道行に結晶させ、

早歌の代表作と呼ぶにふさわしい。とくに、  
来世往生の願いをひたすら歌いあげる「熊野  
参詣」に対し、「善光寺修行」は来世を願  
いながらも現世にひかれる中世人の心情(なご  
り)を、東国の秋の自然の中に情趣豊かに歌  
いあげている。さらに、晩年の明空によって  
「善光寺修行」の情的側面を一層渾然とさせ  
た「旅別秋情」の曲も作られるのである。こ  
れら早歌の旅の曲は特定の主人公をもたない  
が、菅原道真の筑紫への流謫の旅を歌った  
「聖廟霊瑞誉」や、在原業平の東下りをとり  
あげた「伊勢物語」など、主人公の心情を歌  
う道行部分を含む曲もある。

次に「東国下」(海道下とも)は曲舞の曲  
で、この曲舞が作られた時期は、早歌の中興  
期にあたり、明空から数えて四代目にあたる  
坂口盛勝(坂阿)を中心に、その子盛幸(口  
阿)をはじめ、多くの名手が輩出し、武士た  
ちによって盛んに歌われていた。早歌は調声  
人の独唱にはじまり、曲の大部分を数人ない

し数十人の斉唱で歌うので、けっこう付けて歌えたもようである。「海道」も生きて歌われていた時期であるから、「東国下」を作る際に、その中から表現をそのままとり入れることはできなかった。それでもよく見ると、「東国下」の「帰らん事を白須賀に しばしおりる水鳥の 下安からぬ心かな」という部分は「海道」の「水鳥のおりる池田の薄氷」を思わせるなど、短い表現で似た所も見いだされる。また、少しあとの池田の所では「衰へ果つる姿の 池田の宿鷺坂」とあるが、これは早歌「遅々春恋」の「山鳥ののが鏡の 影にも恥ず恋にのみ 衰へ果つる姿の池の いけるばかりに浮き沈み」とあるあたりをとりいられているらしい。「東国下」の曲舞については、申楽談儀の中に、作詞者玉林（琳阿弥）が將軍義満の御意に反し東国へ下つてこの曲を作り、藤若（世阿弥）が歌ったところ、作者を尋ねられて、召し出されたという逸話が見える。この玉林は同朋衆らしく、早歌をよくした人とみられている。実際、この曲舞は、地名の多さ、ほとんどの地名に掛詞を用い、和文脈の所々に漢文脈を交えて変化をつけている点など、極めて早歌的である。盛久という主人公のとらわれの旅という点は、軍記物などの影響もあろうが、そういう要素もとりにいれて、新「海道」を作ったと

ころに、面白さがあったのではなからうか。能「盛久」の作曲は五音によって元雅とわかり、作詞も同人とみられている。この能の本説はふつう長門本平家物語とされるが、話の内容にはいろいろ違う点もある。元雅が「盛久」を作るにあたって、祖父観阿弥時代の「東国下」の存在は、大きかったことであろう。この能は後世改変を加えられたように、誤解もされたが、世阿弥自筆能本によって、問答ではじまり、東海道の道行のついた形が本来のものであることがはっきりした。「東国下」が独立の謡い物として盛久の心情を歌っているところを、能という形で表現する点に「盛久」のねらいがあるのではないか。その際、初めの部分に△なごり▽という語が四回（現行本では三回）も出て来る点、注目される。早歌における△なごり▽の深化は、前述の旅の曲の他に、恋の曲にも認められ、今生のなごりそのものを歌う「余波」の曲（玉林苑下、通阿作詞）に到達する。元雅は「海道」にはじまる東下りの流れとともに、盛久という人物による△なごり▽を一曲の能に表現しようとしたのではあるまいか。

（白百合女子大学教授）